

戦後児童文学に表わされたスポーツおよびスポーツ観の一考察

(昭和51年12月20日受理)

吉野 和子*

村上 春夫**

目 次

はじめに

1. 「国立国会図書館所蔵児童図書目録」におけるスポーツ関係図書の調査概要
2. 戦後児童文学の基本的方向とスポーツ読み物の特徴-1950年代
 - (1) 戦後児童文学の基本方向
 - (2) スポーツ読み物の特徴
3. 子どもの生活・文化の変貌と子どものスポーツ観の形成-1960年代
 - (1) 子どもの生活・文化の変貌とスポーツ
 - (2) 「みる」スポーツへの傾斜とスポーツ読み物
 - (3) スポーツ・フィクション不毛の時代
4. 現行国語教科書および児童文学におけるスポーツ観-1970年代
 - (1) 国語教科書におけるスポーツの取り上げ方
 - (2) 児童文学における「スポーツの夜明け」

おわりに

附表 戦後児童向けスポーツ読み物主要作品年表
参考文献(引用文献をのぞく)

はじめに

戦後児童文学の特徴は、その作品世界の領域の広さと、描かれた子ども像の豊かさにあるといえる。

特に1950年代の後半から60年代、70年代にかけて、高度経済成長下における出版業の盛況とともに、児童向け出版物の量は飛躍的にのび、児童文

学の質・量は戦前とは比べものにならない発展を遂げた。

戦後の児童文学は、1954年に出された「宣言・少年児童文学の旗の下に」^{注1}にみられるように戦前の児童文学における「近代主義に不可欠の合理的・科学的批判精神及びそれにうらづけられた文学上の創作方法の欠如」^{注2}の批判の上になつて、近代的小説精神を中核とする「少年文学」の道を歩むことから出発したといえる。

従つて戦後児童文学は、「子ども自らの目でみた世界観」の創造が何よりも重視され、社会的リアリズムを根底に、子どもの立場から夢や現実を描いていく作品世界が模索され、創作児童文学、ノンフィクション児童文学の分野で子どもの生活が多面的にとらえられた。

しかしながら、戦後の児童文学が、現実の子どもが直面している問題に積極的に答え得たかといえ、必ずしも十分とはいえないであろう。

とりわけ、スポーツの領域において、作品量の少なさ、素材の貧困さははなはだしいものである。この点についての指摘は、「日本児童文学」1975年10月号において有末省三が次のように述べている。

「…私はここで、一つの不思議なことに気がついた。それはこのようなスポーツブームの世の中だということに、それを反映した児童文学作品がほとんど見あたらないということだ。いうまでもないことだが、子どもたちはスポーツに興味をもっているし、またそれは、心身の発達に有益とされているものだ。しかし、なぜか、スポーツをあつかった児童文学はほとんど見あたらないのだ。…彼らの心をいかにとらえるかが大きな問題になる

* 図書館

** 保育実技研究室

児童文学がこのことを見送っているのは、どう考えてもおかしい、と私は思うのだ。」^{注3}

たしかにテレビやマンガや児童向け週刊誌に目をむけると、ここではスポーツを扱った番組や劇画が氾濫し、子どもたちの血を湧かせているのである。スポーツは子どもの世界において大きな位置をしめているのである。それにもかかわらず、スポーツを素材とした児童文学が極端に少ないというのはどうしたことであろうか。このことは戦後の児童文学がめざした「子どもの立場から現実」を描くという方向とは矛盾するように見える。こ

の問題を究明していくことは、戦後児童文学の本質に迫ることであり、また、少量であるとはいえ、スポーツ読み物^{注4}においてスポーツがどのように扱われ、表わされているかを明らかにすることは、1960年代から急速な変貌を遂げたといわれる子どもをめぐるスポーツ・文化状況の中で児童文学およびそこでのスポーツ像の子どもに対する意義を明らかにすることでもある。また、同時に、テレビや週刊誌を中心とするスポーツの扱われ方に対する若干の問題点をも明らかにすることになる。

表1 戦後児童向スポーツ読み物出版状況

分類項目 年次	(1) 技術書 など	(2) フィクション	(3)ノンフィクション				(4) 入門書 解説書	(2)(3)(4) 合計	(5) マンガ	統計	オリンピック開催地
			①	②	③	小計					
1945											
1946											
1947	2								2		
1948	5	3					1	4	4	13	ロンドン
1949	9	4	2	1		3		7	4	20	
1950	4	1					1	2	1	7	
1951	5	1		1	1	2	1	4		9	
1952	3		2	1		3	1	4	1	8	ヘルシンキ
1953	4	1		1		1		2	1	7	
1954	1	2			1	2	1	5	13	19	
1955	3	1		2		2		3	9	15	
1956	3	1		3	3	6	1	8	5	16	メルボルン
1957	5		1	2	5	8	1	9	6	20	
1958	5		3	3	2	8		8	17	30	
1959	4			1	1	2		2	12	18	
1960	8		3	1	1	5		5	3	16	ローマ
1961	4		3		2	5	1	6	3	13	
1962	5		1			1	1	2	7	14	
1963	6		1			1	2	3	2	11	
1964	3		2	1	1	4	2	6		9	東京
1965				2	2	4	5	9		9	
1966	1		1		1	2		2	1	4	
1967	2		1		2	3		3		5	
1968	4	1	1		2	3		4	5	13	メキシコ
1969	5	3	2		1	3		6	6	17	
1970	27	1	3		1	4		5	15	47	
1971	44		3		4	7		7	2	53	
1972	27		5		1	6		6	2	35	ミュンヘン
1973	18	3	1			1	2	6		24	
1974	8	1	2	2		4		5		13	
1975	25		3			3	2	5		30	
合計	240	23	41	21	31	93	22	138	119	497	

注記 ※ノンフィクションの分類項目 ①個人の伝記
 ②スポーツマンシップ、オリンピック読み物
 ③山岳読物
 ※各分類項目下の数字は出版点数を表わす。

ともあれ、現代の子どもに対する興味と影響の大きさに比べて、児童向けスポーツ読み物について十分な研究や作品の検討がなされていない今日、戦後単行本として出版された児童向けスポーツ読み物について一応分析し得た範囲で若干の考察を行うことによって、今後の研究の方向と課題を示すことは積極的な意義があると考ええる。なお、分析に用いた主なる資料は、「国立国会図書館所蔵児童図書目録」に載せられたもののうち、現在国立国会図書館に所蔵されているものすべてを対象とした。さらに、補足として、国語教科書にとりあつかわれたスポーツを分析するため、現在教科書を出版している5社すべての小学校国語教科書昭和49年版及び昭和52年版、中学校国語昭和50年版を用いたことを最初におことわりしておく^{注5}。

1 「国立国会図書館所蔵児童図書目録」におけるスポーツ関係図書の調査概要^{注6}

利用した「目録」は、上・下二巻約2万9千冊にわたるが、その中で戦後のスポーツ物の出版状況は〈表1〉および〈図1〉のとおりである。考察の対象となる作品数は決して多いとはいえない。しかし、その出版状況の変化をみると、いくつかの特徴と問題点を挙げることができる。

作品の内容は、①野球、サッカーなど各種目ごとの技術解説書または各競技のわかりやすい説明書、②フィクション物（創作スポーツ読み物あるいはスポーツ小説）、③ノンフィクション物（選手の伝記、スポーツマンシップ読み物、オリンピック読み物）、④スポーツそのものの入門書、啓蒙書、解説書など、⑤スポーツマンガに大別することができる。①については1968年メキシコオリンピック以降飛躍的に増大し、1969年の落ちこみはあるが、その後再び増加している。②は1949年に50年代の傾向を特徴づける作品がすでに生まれているが、メルボルンオリンピックの後1957年から1967年まで作品の見あたらない空白の時期があ

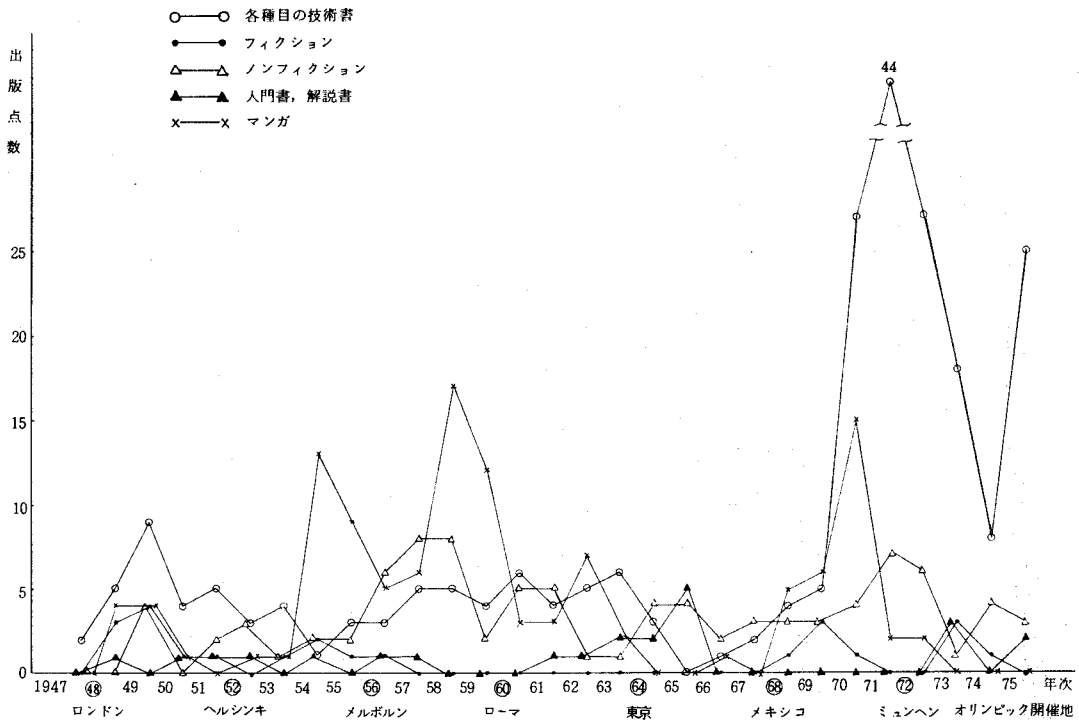


図1 戦後児童向けスポーツ読み物出版状況の推移

る。1969年からわずかではあるが再び作品が出はじめている。③のノンフィクション分野の作品は、④のスポーツ入門書について作品量が多い。戦後30年間はほぼ平均化された出版点数を出している。選手個人の伝記については、1位ベーブ・ルース、2位長嶋茂雄、3位王貞治、その他の順位で多く、特にベーブ・ルースは他の人の伝記に比べて群をぬいている。④においては、オリンピック開催時期を契機に出版量は増大している。⑤のスポーツマンガは50年代後半からふえはじめ、1958年には一つの大きな山がみられる。これは特に1960年代後半から今日にいたる少年少女週刊誌及び雑誌の隆盛および「マンガブーム」の中でスポーツものがとりあげられていく前兆ともいえよう。

以上1945年から1975年までの児童向けスポーツ読み物の全体の出版状況について述べたが、種々のスポーツ読み物の中で、最もスポーツの本質に深く触れ、子どもとの結びつきが追求されているものはフィクションの分野であると思われる。

従って今回の作品の考察の対象は②のフィクション分野にしぼられることになる。

個々の作品傾向は、その時代風潮に深くかかわり、また制約を受ける。戦後児童文学の思潮と作品傾向の特徴は戦後史の時代特徴とほぼ重ね合わせてみていくことができる。したがって、以下、50年代、60年代、70年代の時代特徴を明らかにし、作品の傾向を考察していきたい。

2 戦後児童文学の基本的方向とスポーツ読み物の特徴 — 1950年代

(1) 戦後児童文学の基本方向

ながい戦禍から解放された戦後児童文学運動は、まず自由な文学団体の結成からはじまった。

1946年、民主主義的変革の全般的高揚のなかで、日本児童文学者協会は民主主義的児童文学創造と普及の声を高くあげた。

「日本がいま新しい夜明けを迎えようとしている時、児童文学者の使命もまことに重大であります。軍国主義の教育にゆがめられた児童の精神を解放し、児童の自由な創造的な生活を培うために清新な文芸の沃野を拓く事こそわれわれのねがい

であります。しかし封建的なものは児童文化の上になお色濃く、いまわれわれが相共にこれと闘うのでなければ、日本の児童たちを真に幸福にすることは出来ないであります。ここに同志が結束して立ち、積極的に活動することを誓うものであります。」^{註7}

この日本児童文学者協会結成の「趣意」に顕著にみられるように、戦後開花した児童文学のテーマには、「民主主義のヒューマンイズムがせりあっていた。あからさまな反民主主義的な影をひそめていた時期なので、それが当然の風潮であった」というものの、民主主義を『流行思想』視する立場から人民民主主義革命の遂行をめざす立場まで、児童文学者の思想的分布は多岐にわたっていた。作品のモチーフ、題材、手法も多様であった。^{註8}のである。

戦後児童文学はその夜明けから、1950年代の前半にかけて、民主的変革をおしすすめようとする時代風潮のなかで、真に新しい児童文学創造の道を模索していた。

1954年、その道は具体的に指し示めされることになる。すなわち、早大児童文学会の「宣言・少年文学の旗の下に」である。

「…『少年文学』のめざすところ、それは、従来の児童文学を真に近代文学の位置にまで高めることであり、従ってそれはまた、いっさいの古きもの、いっさいの非合理的、非近代的なる文学とのあくなき闘いを意味する。

我々は『ヘルメン』を克服する。…

我々は『生活童話』を克服する。…

我々は『無国籍童話』を克服する。…

我々は『少年少女読み物』を克服する。…

「児童文学」の総称のもとによばれるこれらのすべては、その意図にもかかわらず、ついに近代文学として位置を確立することができなかったという点で一致する。その重要な根源のひとつがゆがめられた日本の後進的近代にあったとはいえ、同時に、そうした日本の現実に対する『人生の教師』としての作品の、大きく開かれなかった目の狭さ、すなわち近代文学に不可欠の合理的・科学的批判精神、及びそれにうらざけられた文学上の

創作方法の欠如こそが、こうした事態を招来した最も大なる原因であったに違いない。従って我々のめざす道も、真には日本の近代革命をめざす変革の論理にたつ以外にはなく、その論理にうら付けされた創作方法こそが、少年小説を前提としたものでなくてはならぬこともまた自明の理である。

我々が、従来の『童話精神』によって立つ『児童文学』ではなくて、近代的『小説精神』を中核とする『少年文学』の道を選んだゆえんも実そこにある。…』^{注9}

こうして戦後児童文学は、民主主義的変革のエネルギーに支えられ、新しい創作方法を模索し、苦悩の足跡をのこしつつも、時代の要求にこたえる作品を次々に生んでいったのである。

(2) スポーツ読み物の特徴

スポーツをテーマにした創作読み物の分野においても、当時の時代及び児童文学の思潮の影響を深く受けた。戦前の熱血野球小説など、いわゆる大衆児童文学の流れをその作品傾向に強く残しながらも、ヒューマニズムの思想が前面におし出され、それがこの時期の作品の特徴となっている。

昭和23年の「輝く熱球」（五十公野清一）^{注10}、「覆面怪投手」（今井達夫）^{注11}にはじまり、翌24年「栄冠の蔭に」（西野辰吉）^{注12}、「熱球は飛ぶ」（富田邦彦）^{注13}、25年の「紅顔熱球王」^{注14}（五十公野清一）等々（主要作品年表は附表として末尾にある）は、その典型といえよう。

小説の多くは、野球を題材に扱い、戦災孤児や母子家庭の少年など、戦後社会のいたるところで懸命に生活^{注15}している庶民像を主人公に、貧しくとも努力して野球を続け、その中で友情やフェア・プレーの精神を学び、成長していくことをテーマとしている。

「輝く熱球」「紅顔熱球王」（いずれも五十公野清一）は、戦災孤児、「栄冠の蔭に」（西野辰吉）は、靴みがき少年、「熱球は飛ぶ」（富田邦彦）は、母子家庭の少年といったようにまったく主人公の境遇やテーマは一致しているが、当時の読者が自からの貧しい境遇に思いを寄せながら、涙して読んだであろうことは想像に難くない。

物語の結末は、「栄冠涙あり」調ではあるが、

必ずしもハッピーエンドばかりでなく、例えば、「熱球は飛ぶ」では、勝利の栄冠を手にし、喜び勇んで帰宅した時、主人公の母はもうすでに亡くなっており、残された兄弟三人が手を握りあう、といったものもある。

これらのパターンは、昭和28年の「熱球の誓い」^{注16}（富田邦彦）、29年の「涙の甲子園」（北条誠）^{注17}まで続く。

作品の一例として、「涙の甲子園」をみてみよう。

戦争で父を失くした少年が伯父の店の手伝いで練習にも出られず、チームからも誤解される。商売のために「やおちょう」をやれという伯父の主張に反撓しながら、結果的には失敗し、相手チームを勝たす。母は汚名を晴らすためにも野球を続けると励ます。しかし、肝心のグローブが友だちから貸してもらえず、母は質屋を散々歩きまわってボロボロのグローブをみつけ、修理して試合に間に合やす。

「『修ちゃん、ごめんなさい。お母さまがいくじなしなもので、こんなものしか買えなかったの。きっと、きっと、今にいいものを買ってあげるから、きょうだけはこれでがまんしてね』

修のまくらもとで、たまらなくなって、しゃくりあげのお母さま…』（p.83）

「ボログローブ」とはやしたてられながらも、主人公修は力投、ついに勝利。友と和解し、やがて甲子園優勝をめざすことを誓いあう。

「いつ、だれが聞きだしてどうつたわったのか、

「修のグローブは、お母さんのお手製だそうだ」

「今村にグローブをとりあげられて、お母さんが徹夜で作ってくれたそうだ」

ささやきがあちこちに聞こえる。

「なんていいお母さんなんだ…それに修ちゃんて、なんていいやつなんだ」

いつか敵も味方もみんな涙ぐんでいた。』（p.93）

しかし貧乏な修は高校進学などとうていできそうにない。そこで友の父の援助で進学、アルバイトしながら頑張る。晴れの甲子園出場を果しながら修は不調、友の友情に励まされて再帰、しかし、友は突然の交通事故で死亡、友のとむらい合戦で

ある決勝で見事勝利するのである。

ここに描かれたスポーツ像は貧しい者の味方であり、選ばれた者のみのスポーツではない。戦後の時代思潮の特徴としての社会性に加えて、体育・スポーツ界の「民主化」が押し進められた「新体育」の建設期^{注18}と符合を同じくしている。そして、「アスレティック・フォア・オール」(みんなのための「競技運動」)^{注19}を小説の中でも再現したということもできる。戦前のスポーツの克服が児童文学においてどのように表現されたか、あるいは、児童文学者が戦後のスポーツをどのようにとらえようとしたかの反映でもある。そのあたりになると、小説とはちがうが、よりスポーツ界と近い位置にあった間中進は、「スポーツの心」(昭和26年)^{注20}の中で新しい変革の息吹きに満ちあふれた作品を残している。

「過去のスポーツ教育には、余りにも弊害が多過ぎました。それは勝利至上主義の観念が底を流れていた為に、自然に英雄主義を生み、ついに独裁主義へと進展してしまったのです。そうして、機会は不均等になるし、個性は全く認められなかったし…。もうそろそろ「勝った方がいい」主義の古い衣は脱ぎ捨ててもいい頃でしょう」^{注21}

この時期の作品にみられるスポーツ観は、新教育の民主主義、自由主義を旗じるしとした「民主化」の方向と完全に一致している。戦後の日本の教育のあり方に大きな影響を与えた「第一次米国教育使節団報告書」(昭和21年)では、「子供の持つ測り知れない資質は、自由主義という日光の下においてのみ豊かな実を結ぶ」とし、「この精神のあるところには、民主主義が既に根をおろしてゐる」と説き、さらに、「競技(スポーツ)を愛するからやるのだが、しかし、その規則に従ってやる運動家(スポーツマン)は、かういう生活の仕方(民主主義的な生活)のよい手本である」(傍点および括弧は筆者)とし、また、「民主主義的教育に対する寄与の可能性は正に多大である」として、スポーツの奨励を主張していた。^{注22}

「よい手本」とされたそのスポーツはすでに述べたように「アスレティック・フォア・オール」

の体现であり、戦前のスポーツの克服をふくむものであった。作家達の眼に映ったこのような戦後のスポーツは、敗戦にあえぐ子どもたちに明るさをとりもどし、夢を与えてくれる「贈物」であった。富田邦彦は、「野球の好きな少年に、悪い少年はいない。」と励まし、「みんなが心を合わせ、力をあわせて楽しむスポーツ」「りっぱな人間性をやしなうスポーツ」を描くことを試み、その小説は、「みなさんのありのままのすがただと思っただけ読んでいただきたいのです。そして、どうかりっぱな少年になってください。」と説いた。^{注23}

このように戦後の新しい息吹きに満ちあふれたスポーツ読み物は、荒廃した日本の子どもたちに夢と希望を与え、民主的なスポーツ観を育てる萌芽になりえたものの、そこには子どもの生活現実とスポーツ界の構造的体質にメスを入れることなく、皮相な「社会性」に終始し、最後には、「涙」「勝利」「友情」のうちに子どもを酔わせてしまうという限界をもち、そのため現実の子どもたちの生活土台の変貌の下で十分に発展させられず、いつしか姿を消していくことになる。

3 子どもの生活・文化の変貌と子どものスポーツ観の形成 — 1960年代

(1) 子どもの生活・文化の変貌とスポーツ

所得倍増10ヶ年計画に象徴される高度経済成長政策は、国民の労働、および生活に急激な変化をもたらし、「過密」「過疎」「公害」「住宅難」「共働き」「非行」等々の言葉に見られるように、子どもをとりまく生活環境を一変させた。そして、子どもの生活は、現代っ子の代名詞のごとく用いられる「テレビと塾通い」によって、これまた戦後の子ども像と子どもの文化状況を大きく変えているといえよう。これらの状況については他の報告等^{注24}に譲るとして、ここでは、体育・スポーツに関係深い事柄についてのみとりあげる。

都内A小学校4年生に「聞き取り調査」^{注25}を行ったところ、「学校から帰ってすぐ塾に行く。塾からもどると、もう外で遊ぶ時間がなくて、夕食まで兄弟たちとテレビを見る」という意見が典型的であった。このような傾向は、筆者の調査に

限らず、一般的傾向として示されている。^{注26}また高度経済成長政策による社会構造の根本的变化は、子どもたちから、「遊び」の時間をうばい、テレビ中心の思考方法を余儀なくさせる。^{注27}このことは、同時にテレビっ子たちの体力不足をもたらしている。^{注28}そして、それは、「子どもたちのからだをめぐる状況は、このまますすめば、民族とか、人種の将来に多大な禍根を残すような事態ではないだろうか」^{注29}といわれるほど深刻である。

かつて「子どもは風の子」といわれ、北風の吹く中でも草野球や鬼ごっこ、木のぼりと、日が暮れるまで元気にかけまわっていた。しかし、現在では、学校の体育の時間をのぞくと、スイミングクラブに通ったり、リトルリーグに入ったり、「〇〇スポーツ教室」に入会するといったスポーツ「塾」通いのような形でしか、直接にスポーツをする機会がなくなりつつある。大半の子どもは、学校の体育時間、あるいは放課後の運動場で遊んでいる時しか、身体を動かしたり、スポーツに親しむ時間は持っていない。このような中で、スポーツに対してどのような見方を、子どもたちはしているのか、「聞き取り調査」の結果について若干ふれる。「スポーツという言葉をきいて、どんなイメージを思い出すか」という質問に対して、「たのしいもの」「つらいもの」の両方の解答があった。また「スポーツは見るものか、やるものか」という質問に対して、「やるものでなくてはおかしい」という意見が出された。「スポーツという言葉から直接的にどんな運動を思い出すか」という質問に対して、①サッカー ②ハンドボール ③野球 ④水泳がまず挙げられた。これらは、子どもたちが体育の時間に親しんでいる種目であった。更に「スポーツのどんなところがお

もしろいと思うか」という質問に対して、「体を思いきり動かせるから。大きな声を出して飛びまわれるから。勝敗があってスリルがあるから」等の解答が出された。

子どもたちは非常にスポーツを好む。その要求度は、外あそびの調査でも明きらかである。^{注30}それによると、室内遊びと外遊びとどちらが好きか、という問いに対しては、①男子96.2%、②女子95.2%が外遊びを希望している。またその場合、好きな外遊びのうちわけをみると表2のとおりである。

子どもたちはわずかな時間をとおしてしかスポーツの本質的なよろこび、例えば「身体機能使用のよろこび」^{注31}さえも十分に享受していない。子どもたちのスポーツ要求が満たされないばかりか、疎外されることによって、「体育嫌い」「運動嫌い」がつくられていくことになるのである。

(2) 「みる」スポーツへの傾斜とスポーツ読み物

急速に普及したテレビ、いわゆるマスコミ文化を通して、スポーツを題材にした「スポーツ根性物」といわれる子ども向け番組が隆盛をきわめた。したがって、スポーツ・フィクション空白の時期といっても、子どもたちがスポーツ物に興味を失ったり、関心を持っていないというわけではないのである。

1969年子ども白書^{注32}によると、梶原一騎作「巨人の星」の人氣が「異質なほど」高まっているとある。

「人間には、それぞれの道がある。

どんなに苦しくても、おれは……星飛雄馬はきずだらけでやる野球をえらぶ。

地をはって、きずだらけになろうとも、その血

表2 外遊びベスト5

「子ども白書」1973年版より

	1位	2位	3位	4位	5位
男子	野球 42	ボール遊び 23	自転車 17	鬼ごっこ 16	かんけり 15
女子	バレーボール 48	なわとび 35	ボール遊び 26	鬼ごっこ 19	バドミントン 16

(数字はパーセント)

みどろの手で、つかみとってみせる。

巨人のでっかい星の栄光を——。(小説「巨人の星」第2巻巻頭より)

この作品内容に象徴されるように、ここではスポーツそのものを描いているのではない。^{注33}

子どもたちがスポーツ根性を非常によろこび、求めるのは、子どもたち自身が実際にスポーツをやっている、親しんでいるという生活の実感からくるのではない。むしろ自分たちの生活にない「あこがれの世界」を求めているといえるのである。子どもたちは現実においてスポーツ要求が満たされないうまま、一方で「友情を犠牲にし、仲間をけ落しても、何がなんでも目標にむかって体当たりしていく主人公」に深い共鳴を寄せているのである。

「(飛雄馬)はぼくとちがってがまん強いと思った。ときどきくじけそうなときもあるけれど、それを乗り越えていくそんな飛雄馬の父は自分のことをぎせいにしても、自分のむすこをりっぱな選手にするそんな父はえらいと思った(四年男子)」^{注34}

根性は古いといわれながら、高度経済成長下の子どもの受け入れられるのはなぜだろうか。それはなによりも、子どもたち自身があくどい商業資本のもとでは「消費の神さま」となっている一方、テスト攻めの受験体制のもとに翻弄されているからである。

またこうした根性が、スポーツを通して描かれ、熱狂的に受け入れられたということは、子どもたちにとってスポーツそれ自体が現実の世界ではなく架空の世界であることを意味し、まさに現代は実際に体を動かし、汗を流して「やる」スポーツよりも、「みる」スポーツ、すなわちマスコミ文化を通してのスポーツ享受に傾斜しているのである。従って「みる」スポーツであるがゆえにスポーツ根性論が安易に受け入れられるのである。

(3) スポーツ・フィクション不毛の時代

50年代を特徴づけるスポーツ「民主化」をめざした作品とその思潮は、60年代には、あとかたもなく消えていった。

この兆候はすでに1957年からあらわれ、その後

10年間の空白の時期が続く。(表1及び図1参照)

児童文学の、とりわけ創作児童文学の分野においては、複雑な時代背景の中で、質・量とも「児童文学の花ざかり」現象があらわれた。それは先に述べたように、高度経済成長下における出版資本のおびただしい増大のゆえであった。

50年代の民主的児童文学の思潮は、ここに大きな転機を迎える。

後藤竜二は次のように指摘している。

「山中恒に顕著にみられるように、子ども独自の価値観の追求を肥大化させて、社会としてでなく、それから『独立』した非社会性としてとらえ、固定観念化させていった。また現実の子どもと子ども像の追求は、それを『類』としてとらえ、パターン化することにすり変えられていったのである。…『繁栄』の現実のなかで個性と肉体を持って生きるひとりひとりの子どもに対する執拗な追求は弱められ、現実のはげしい生活とときはなされた小市民的な子ども観が生まれていった。」^{注35}

しかし一方では、このような商業資本のえじきとなった「非社会的、非現実的」な子どもの倫理に対して、横谷輝は、「子どもの存在が社会にとってなにを意味するのかをあらためてこのあたりで新しい目でとらえなおす必要がある」^{注36}と指摘した。このように60年代は、50年代の文学思潮が複雑な時代状況を反映して、二つの大きな潮流に分かれていくことになるのであるが、スポーツ・フィクション及びその他のスポーツ読み物の世界ではまさに無風状態であった。

スポーツ界に目を転ずると、プロスポーツ全盛期をむかえ、子どもたちにとっては新しいスターやアイドルがつくられ、「巨人、大鵬、卵焼き」といわれるほどの人気であった。一方、アマチュア・スポーツ界では、戦後のアスレティック・フォア・オール理念や「民主化」の理念は、国際スポーツ界に復帰し、オリンピック参加を重ねるごとに、「オリンピック主義」は強まり、また、勝利至上主義、選手中心主義が叫ばれることになった。^{注37}

具体的には、「学徒の対外競技基準」の緩和をはじめ、1952年のヘルシンキオリンピック以後、とくに「選手養成制度」の確立などにみられるよ

うに、戦後の国民体育大会の地方持ちまわり精神にみられるような国民大衆のスポーツ普及への力点が、「出るからには勝つ」という形で大衆化をおきざりにしての高度化への志向となっていた。その頂点に1964年の東京オリンピック大会が立つことはいうまでもない。^{注39}

このようなスポーツ界の変化の中で、国民のスポーツに対する関心、いいかえれば「東京オリンピック熱」を反映させたのは、すでに述べたようにスポーツ・フィクションの分野ではなく、むしろ60年代急速に普及したテレビにおけるスポーツマンガや、少年少女児童向け週刊誌であった。その典型が、先に述べた「巨人の星」である。1968年に出版されたこの小説は、同時に、テレビマンガや週刊誌の劇画化もされ、爆発的な人気を呼んだ。^{注39}

60年代のオリンピック熱は勝利至上主義の風潮をつよめ、スポーツ根性物の読み物を流行させた。

たとえば当時のベストセラー大松博文著「おれについてこい！」^{注40}はその典型といえる。

「…試合は真剣勝負であり、戦争と同じで現在のスポーツは殺すか殺されるかだ。殺すという言葉は、穏当を欠くけれども、2位ではなんの価値もない。あくまでも完勝の一位でなければ無意味なのだ。」^{注41}と大松は勝利絶対主義のスポーツ理論を述べている。

「巨人の星」はオリンピックこそテーマにしていないが、スポーツ根性論の時代の流行を反映させた作品であった。

「思い込んだら試練の道を／ゆくが男の土根性／真赤に燃えた王者のしるし／ゆけゆけ飛雄馬、ドンとゆけ」と主題歌は子どもたちに圧倒的な人気を呼び、巷を流れた。

当時のスポーツ漫画に対する石子順の「…ここにはスポーツのあり方、スポーツの精神、スポーツの内容が正確にとらえられていません。つまりスポーツを描くのではなく、スポーツを利用して世に出る、スポーツを使って人間をしごきあげ、成功させるということを描く」^{注42}という批判は、認めざるを得ないように考える。しかし、児童文学においては、作品そのものも単行本として出版

されておらず、60年代の児童文学における本格的なスポーツ・フィクションの分野においては、不毛の時代といわなくてはならない。

4 現行国語教科書および児童文学におけるスポーツ観 — 1970年代

70年代における子どもの文化状況は、60年代の状況より深刻化し、いっそう、子どもたちの人間性と人格の疎外状態は進行したとみることができ。非行の低年齢化というショッキングなニュース、「無気力、無関心、無責任、無感動、……」「シラケ」といった子どもをめぐる生活、文化の変貌は、これ以上説明する必要はないであろう。ここで強調されなければならないのは、このような状況の中で、一方、「子どもを守る」運動が以前にもまして取りくまれ、後に述べるようにスポーツの民主主義的発展と呼応してその成果の結実がみられることである。

ここでは、学校教育における国語教材としてのスポーツと、児童文学における新しい芽ばえとの対比の中で、今後の課題をさぐるための若干の考察を試みる。

(1) 国語教科書におけるスポーツの取り上げ方

現在小中学校で使われている国語教科書1974年版（小学校）、1975年版（中学校）及び来年度から使われる1977年版（小学校）を対象に調査すると、スポーツが素材となっているものは表3（1～3）のとおりである。

これらの中には、①スポーツの由来、ルールの歴史、スポーツ科学に関するもの ②スポーツマンシップを説いたもの（特にフェアプレーの精神を主題としているもの） ③スポーツをするよろこび、友情、クラス全体がひとつの目的にむかってまとまって行動する楽しさなど、④練習のきびしさ、苦労話を主題としたもの ⑤スポーツ特有の躍動美、健康美をうたったもの ⑥体力増進、⑦その他に区別することができ、それぞれの数は表4の如くである。

①ではなぜマラソンとよぶのか、その由来と根底に流れる思想が日本書籍小学4年次の1974、77年版共に載っていた。小学5年次には「スポーツの

表 3-1 小学校国語 1974

(昭和49年版)							
学年	1	2	3	4	5	6	計
東京書籍	○			○		○	3
学校図書							0
光村図書		○		○○			3
日本書籍			○	○		○	3
教育出版					○		1
	1	1	1	4	1	2	10

表 3-2 小学校国語 1977

(昭和52年版)							
学年	1	2	3	4	5	6	計
東京書籍	○○				○		3
学校図書	○○			○			1
光村図書				○		○	2
日本書籍	○			○		○	3
教育出版					○		1
	3	0	0	3	2	2	10

表 3-3 中学校国語 1975

(昭和50年版)				
学年	1	2	3	計
日本書籍				
学校図書	○○○			3
教育出版	○	○		2
光村図書			○	1
東京書籍	○			1
三省堂	○			1
	6	1	1	8

ルール」(教育出版小5昭.52)としてラグビーの起りを例に、ルールというものが時代とともに合理性をめざして変化していくと説明されている。低学年次にこの種の見あたらない。スポーツのルールや精神を説くものは、4年次以降になっている。②のスポーツマンシップでは、勝負の途中でありながら、競争相手のチームの人命を救った話「人間愛の金メダル」(東京書籍小5昭.52)や、遅れてもなお完走した勇気あるスポーツマン「ゼッケン67」(光村図書小4昭.49)また、スポーツは単に勝ち負けの結果ではなく、要はその過程が大切なのだと卒業作文集にスポーツの思い出をつづった作品「敗退」(光村図書中3昭.50)があったが、きしい練習に打ち勝った者のみに知り得るスポーツの真のよこび、言いかえればスポーツの本質に触れ

表 4 教科書であつかわれた
スポーツ物のうちわけ

	分 類	数
1	スポーツの由来	5
2	スポーツマンシップ	4
3	練習のきびしさ	5
4	スポーツをするよこび	3
5	スポーツの美	2
6	体力増進	3
7	その他	3

と思われるこの主題は教科書では意外に少なかった。③は、②と表裏をなすものと考えられる。「スポーツが与える三つの宝」(教育出版中3昭.50)、「練習と人生」(東京書籍小6昭.49)はともにスポーツが体と精神をきたえるものであり、同時に非常な努力は綿密な計画のもとでのみ最後の勝利が得られる「マカールの旗」(光村図書小6昭.52)、「アイガー北壁直登記」(教育出版中1昭.50)など多彩であった。④のスポーツをするよこびでは、チームワークと協力の大切さを体育・スポーツを通して知っていく過程を描いたものが「バトミントンとわたし」(学校図書中1昭.50)を代表に挙げることができる。⑤のスポーツの美では、詩二編、多少もの足りない点数であった。⑥の体力増進では、「朝のマラソン」(日本書籍小6昭.52)が1974年、1977年共に載っていた。ここではスポーツが体力をつけるためのものと規定され、しかも体力は個人の条件に合わせてやればよい。力のない人、できない人はそれなりに頑張りましょうという体力絶対論に陥っている。なぜ体力に個人差があるのか、という問いかけなしに皮相なヒューマニズムに安直に結びついている。障害者にもスポーツを、と叫ばれている今日においても、スポーツをする権利とか、スポーツを疎外している現実の問題に目を向ける教材は皆無といってよい。またスポーツ特有の血を湧かせるようなスリルとかスピード観にあふれているものもなかった。マンガで問題になっている根性物についてみると、③の練習のきびしさに関連するであろうが、マンガなどのような露骨さではなかった。以上のように、国語教材にあらわれたスポーツの

様相について考察したが、全体として新鮮味あふれるテーマと素材は見当たらない。限られた年次のみ対象としたので、扱われた素材の年代変遷まではつかみきれなかったが、この点、調査した範囲の中では変化に乏しかった。

今日、スポーツが「みんなのスポーツ」として、「権利としてのスポーツ」が主張され、国民スポーツの発展^{注43}が問われている時に、現行教材の中から、教師がどのように子どもたちの生活現実から迫り得るか、疑問である。「シラケ」「無気力」が特徴といわれる現代の子どもの実態やスポーツ要求からかけ離れて、題材があつかわれ、そこにはいぜんとして伝統的スポーツ観が主流をめているからである。しかしこの点については、課外活動および必修クラブ等をふくめた学校教育全体での体育・スポーツ活動の現状の中から深められる必要がある。

(2) 児童文学における「スポーツの夜明け」

60年代の高度経済成長は、さまざまな問題を生み、「虚構」の繁栄は音をたててくずれていった。

70年代の児童文学は、その矛盾に満ちた「現代」を更に深くみつめ、解明の手がかりを模索していく^{注44}

たとえば歴史の流れの中で「現代とは何か」を問いつづける民話や、歴史物語が息長く、しずかなブームを呼び、その中で、この現実を地の底からゆり動かし、歴史を担ってきた民衆像が豊かに描かれた。

スポーツ読み物の分野においては、60年代の深い反省の上になつて、新たな飛躍を告げる作品があらわれた。

「甲子園の土」(藤田圭雄)^{注45}は、本格的なスポーツ創作児童文学として、格調高い短編である。多少内容に触れてみよう。

甲子園は野球をする者にとって特別な意味がある。選手たちは、いつの日か甲子園の土を踏むことを夢みて苦しい練習にも耐えるのである。A商野球部のキャッチャーで、キャプテンの八郎の家に身を寄せるオッチャンは、試合に敗れた選手たちが、涙を流しながら甲子園のグラウンドの土を手にとっているのをテレビで見て、さっそく妙案を思いつ

いた。オッチャンは、この特別な「甲子園の土」でひと儲けしようというのである。

勝負は微妙なものだから、時には選手たちは自分の力に自信を失ない、「つき」「かん」にたよりたくなる。オッチャンの売る「土」は、こんなときかっこうのおまじない。八郎の仲間、強打者の井上はすっかりこの「土」のとりこになる。そこで監督はひそかに足もとの土を入れかえた「甲子園の土」を渡す。やがて井上は、自分がいつの間にか真剣に腕をみがくことを忘れていたのに気づくのである。

ここにはスポーツのデリケートな一面と、試合にかける選手たちの心情が生き生きと描かれ、スポーツを通して友情を育てていく世界が広がっており、読者にさわやかな読後感を与えずにおかない。

続く短篇「選手って何だろう」も同様にスポーツを愛する少年群像が現実的な問題追求の深まりの中でとらえられている。味わいのある作品である。

また純然たるフィクションとは異なるが、「スポーツの夜明け」^{注46}(城丸章夫・永井博)は70年代のスポーツ読み物としてユニークな作品である。それは日本のスポーツの民主的伝統を掘り起しながら、国民の体育・スポーツの権利の獲得と定着化のための道すじをわかりやすく解説し、学校体育場面での実践や障害者のスポーツ、東京オリンピックなどを子ども・障害者・国民の立場からとらえなおしていくという画期的なものである。この種のものでは「スポーツとは何か」^{注47}(中村敏雄)もある。

70年代を「スポーツの夜明け」の時代とするならば、それはまさに、はじめて真の国民のためのスポーツ——「いつでも、どこでも、だれでもがスポーツを」が、問題となるのである。これは従来のチャンピオンシップスポーツ、勝利至上主義と異なるものである。

おわりに

以上、戦後出版された児童文学におけるスポーツをテーマとした作品について、各時期ごとの作品傾向を、戦後児童文学がめざした方向及び課題

との連関において考察した。

50年代に、スポーツ読み物においてかかげられたスポーツの「民主化」, 「アスレティック・フォア・オール」の理想は当時であってそれなりに積極的側面を持っていた。それゆえに、これらの作品傾向はその頃の民主的変革の力強い息吹きのなかで、多くの子どもに受け入れられたのであった。

しかし、60年代のオリンピック全盛期に入ると、不毛の時代が続く。一方急激に普及したテレビ・週刊誌の分野においては、いわゆるスポーツ根性物が流行し、あたかも「根性」そのものがスポーツの本質であるかのような錯覚までも子どもたちに与えずにおこななかった。このような時代風潮に対して、はやくから警鐘の音があがったが、60年代を克服する作品は、70年代の半ばに到るまであらわれなかった。

なぜ50年代の積極的提言はざ折してしまったのか。

本稿では、この問題の解明を、50年代以降急激に変貌した子どもをめぐる文化・スポーツ状態の考察に求めた。

60年代の高度成長経済は、子どもの生活に本質的な変化をもたらした。もはや「六三制野球ばかり上手なり」のそれではなく、「塾とテレビ」の連続であり、子どもたちは活字文化から遠ざかった。

スポーツ環境の貧困はひどい遅れをみせ、子どもたちは、学校体育の時間しかのびのびと体を動かせないのが実状である。

テレビでは、ただおもしろ、おかしさを売り物にしたナンセンスギャグや、怪獣物、スポーツ根性物が氾らんし、子どもたちは、非現実であるがゆえに、架空のあこがれの世界をその中に見出す。古い古いといわれながらも、点取り主義が先行するテスト体制の学校生活という現実こそ、「なにがなんでも根性一途」のスポーツ根性物を受け入れる土壌なのである。

結論的にまとめると、60年代、70年代の時代状況の急激な変貌に対して、50年代の積極的な主張、提言がスポーツ分野においてはほとんど影響をもつことができなかったといえる。また、占領軍の

「非軍事化」の方針は、体育・スポーツ界の一定の「民主化」に貢献したが、体育・スポーツ界内部での戦争反省をふくむ戦前の克服が十分なされず、その後の時代の進展の中で、子どもたちのスポーツ、国民のスポーツの民主的なたりくみをおきざりにしてきたという客観的な条件は無視することはできない。それだけに「いっさいの古きもの、いっさいの非合理的、非科学的な文学とのあくなき闘い……」^{註48} という鋭いメスを、スポーツの分野にまで及ぼすことはできなかったといえよう。

またスポーツ読み物に必然的に要求されるスピード感、スリル、集団心理の描写など、手法の点で未開拓の分野であり、劇画の方が描きやすいという側面も無視することはできない。

子どもたちは、60年代、70年代の社会構造の根本的な変化の中で、スポーツ要求を満たすことができないでいる一方、子ども向けテレビ番組の「スポーツ根性物」に血を湧かせている。

しかし、子どもたちは決してこの現実に満足してはいない。

今、現代社会の様々な矛盾のなかで、子どもの悩みに真に答える児童文学作品が求められている。

スポーツの分野においても、スポーツの本質と、日々成長していく子どもの姿や、子どもの求めているもの、特有の性格などと深くかかわった作品が生み出されなければならない。

かつて「宣言・少年文学の旗の下に」が主張したように、悩み多い現代の子どもの生活が堀り下げられ、たとえ貧困であっても、その現実から目をそらすことなく、スポーツを懸命に求めている子ども像および子どもの生活が描かれてこそ、極端に一面化された現代のスポーツ読み物を克服することができるであろう。

今後一層の児童文学研究と、体育・スポーツ研究の密接なかかわりと協力が望まれる。更に、読み手としての読者および教師をふくめた国民的な創造活動——子どもの文化を守り育てる運動の中でこれらが検証されていくことがより重要となろう。

最後に、本稿では児童文学におけるスポーツに

焦点をあてたが、今後、少年少女雑誌、テレビ等々の巾広い、子どもをとりまくマスコミ文化すべてを視野において全面的な研究がとり組まれることを期待したい。

注1 「宣言・少年児童文学の旗の下に」1954年
早大童話会が発表した。『日本児童文学』復刊10号1954年

注2 同上

注3 有末省三「スポーツと児童文学」(『日本児童文学』1975年10月) p11

注4 スポーツ読み物を、フィクション、ノンフィクション(個人の伝記、スポーツマンシップ読み物、オリンピック読み物、山岳読み物)及び技術書、ルール解説書をのぞくスポーツ入門書、解説書に分類した。また本稿における大衆児童文学とは、昭和初年から10年代にかけて書かれた少年歴史小説をはじめユーモア小説、少年探偵小説など、あらゆる少年向け読み物の総称を意味する。

注5 テレビ番組、少年少女雑誌、週刊誌等におけるスポーツのとりあげ方の分析は重要な課題ではあるが、今回はテーマを限定したため必要範囲で若干ふれるにとどめた。

注6 同目録は、わが国で最も権威のある児童図書目録であり、国内で出版されたすべての児童図書が収録されるたてまえとなっている。なお今回の調査ではそのすべてに目を通したが、万一見落としがあればご指摘願いたい。

注7 1946年3月日本児童文学者協会創立趣意
菅忠道著『日本の児童文学』大月書店
1956年 p342

注8 同上 p370

注9 注1と同じ。

注10 五十公野清一著『輝く熱球』まひる書房
1948年

注11 今井達夫著『覆面怪投手』春江堂 1948年

注12 西野辰吉著『栄冠の蔭に』偕成社 1949年

注13 富田邦彦著『熱球は飛ぶ』妙義出版社
1949年

注14 五十公野清一著『紅顔熱球王』偕成社

1950年

注15 宮原誠一・丸木政臣・伊ヶ崎暁生・藤岡貞彦編『資料日本現代教育史』I(1945-1950)
三省堂1974年、および小川太郎著増補『日本の子ども』新評論1966年

注16 富田邦彦著『熱球の誓い』ポプラ社1953年

注17 北条誠著『涙の甲子園』ポプラ社 1954年

注18 竹之下休蔵・岸野雄三『近代日本学校体育史』東洋館出版 1959年 p232~

注19 『新修体育大辞典』不昧堂1976年によれば「第一次大戦前後、アメリカにおいて対抗競技で、いきすぎた選手制度に対する批判と学業に対する弊害が指摘された。その中で、一部の学生だけでなく、多くの学生のためのあり方が説かれ、そのスローガンとして、『アスレティック・フォア・オール』が掲げられた。戦後、日本における新教育体制下において、戦前のスポーツや運動部のあり方の反省から、全員参加の『特活クラブ』や校内大会が試みられたのは、同様の流れの中でとらえることができる」とある。

注20 間中進著『スポーツの心』逍遙書院1951年

注21 同上 p195~196

注22 「米国教育使節団報告書」(宮原他編『資料現代日本教育史』I三省堂) p46, p56

注23 注16はしがきより

注24 『児童福祉白書』厚生省児童局編 1963年、
『子ども白書』草土文化社1967年~1976年の
子どもの生活環境及び文化に関する項目参照。

注25 1976年11月13日世田谷区にある公立A小学校4年次のクラスにおいて、パネルディスカッション形式で「子どもの遊び場をはじめ、塾やおけいこ事を含む生活時間、テレビ番組やスポーツに対する感想」等、聞き取り調査をおこなった。なおパネラーの人数は10名、質問項目によって他の子どもも発言した。

注26 朝日新聞1974年5月4日付「余暇開発センター」調査によれば、テレビを見る時間が遊び・勉強時間をぬいてトップ。塾通いは三人のうち二人。遊ぶ場所は家の中が多いとある。

注27 古田足日著『児童文学の旗』理論社1974年

- p 300 によれば「今日、学校をのぞくと、子どもの生活時間は、多くの場合、テレビ中心に構成されている。それは、ただ単に時間の量の問題ではない。構想力の源泉を、人間、社会についての認識を、子どもたちはテレビ、漫画から吸収していくのである。」とある。
- 注28 朝日新聞1976年10月16日「水ひとかきでポケモン——現代の骨は異状にもろくなっている」の記事がある。
- 注29 内海和雄・高柴光男・山口勤「いま新たな決意で『身体と教育』を」(『教育』1975年8月号) p79
- 注30 『子ども白書』1973年版 草土文化社 p100～
- 注31 城丸章夫著『体育教育の本質』明治図書1960年 p144
- 注32 『子ども白書』1969年版 草土文化社 p160, p164～166
- 注33 石子順著『子どものマンガをどうする』啓隆閣新社1976年 p215
- 注34 『子ども白書』1969年版 草土文化社 p160
- 注35 後藤竜二「ヒューマニズムへの道」(『日本児童文学』1976年10月) p17
- 注36 横谷輝『児童文学の思想と方法』啓隆閣1967年
- 注37 関春南「戦後日本のスポーツ政策——オリンピック体制の確立」(『経済学研究』14 一ツ橋大学1970年) p156
- 注38 同上
- 注39 「巨人の星」に対する評価はさまざまにわかれており、次のものがくわしい。
- ・清水哲男「野球漫画『巨人の星』論」(『スポーツジャーナリズム』三一新書1971年所収)
 - ・石子順造著『戦後マンガ史ノート』紀伊国屋書店1975年
 - ・石子順著『スポーツ漫画の巧罪』啓隆閣新社1976年
 - ・「『巨人の星』をどうみるか」(『子ども白書』1969年版 草土文化社) p164
- 注40 大松博文著『おれについてこい』講談社1963年
- 注41 同上 p154
- 注42 注33と同じ p215
- 注43 『体育科教育』1976年臨時増刊「国民スポーツの課題と挑戦」、他スポーツ担当大臣ヨーロッパの「みんなのスポーツ憲章」を見よ。
- 注44 『日本児童文学』1976年4月 p25
- 注45 藤田圭雄著『甲子園の土』講談社1975年
- 注46 城丸章夫・永井博著『スポーツの夜明け』新日本出版社1973年
- 注47 中村敏雄著『スポーツとは何か』ポプラ社1973年
- 注48 注1と同じ。

参考文献 (引用文をのぞく)

- ・菅忠道他『作品による児童文学史』全3巻 牧書店1968年
- ・鳥越信『児童文学入門』国土社1969年
- ・鳥越信『児童文学の世界』鳩の森書房1973年
- ・関英雄『児童文学論』新評論1968年
- ・鳥越信『日本児童文学史研究』風涛社1975年
- ・岸野雄三・成田十次郎他編集『近代体育・スポーツ年表』大修館書店1973年
- ・『現代教育学講座』身体と教育 岩波書店1961年
- ・竹之下休蔵編『スポーツの社会学』大修館書店1962年
- ・生活科学調査会編『スポーツの社会学』医歯薬出版1962年
- ・牛嶋秀彦『スポーツ狂気と日本人』エール出版社1972年
- ・『第一回全国体育・スポーツ総合研究集会報告集』1971年
- ・川合章『子どもの発達と教育』青木書店1975年
- ・一番ヶ瀬康子他『子どもの生活園』NHKブックス1969年

吉野和子・村上春夫

附表 戦後児童向けスポーツ読み物
主要作品年表

西暦	フィクション	ノンフィクション	入門書・解説書(技術書をのぞく)
1948	少年拳闘王 (古川真治, 春江堂) 輝く熱球 (五十公野清一, まひる書房) 覆面怪投手 (今井達夫, 春江堂)		オリンピック物語 (青橋, 海住書店)
1949	熱球は飛ぶ (富田邦彦, 妙義出版社) 涙の応援歌 (富田邦彦, 偕成社) 青春野球手帖 (サトウハチロー, 石狩書店) 栄冠の蔭に (西野辰吉, 偕成社)	ベーブ・ルース-野球王 (沢田謙, 偕成社) スポーツと冒険物語 (広瀬・豊島, 新潮社)	
1950	紅顔熱球王 (五十公野清一, 偕成社)		
1951	スポーツの心 (間中進, 逍遥書院)	スキーとともに (猪谷六合雄, 筑摩書房) オリンピックの話 (鈴木良徳, 筑摩書房)	オリンピック物語 (大島鎌吉, あかね書院)
1952		ベーブ・ルース (久保喬, あかね書房)	
1953	熱球の誓い (富田邦彦, ポプラ社)	少年オリンピックものがたり (鈴木・佐々木, 東西文明社)	
1954	涙の甲子園 (北条誠, ポプラ社)	少年講談雷電為右衛門 (大日本講談会編, 若潮社)	
1955	少年打撃王(大林清, 光文社)		
1956	スポーツ物語 (志村正順編, アルス北原)	エヴェレストの歴史 (レオナード・ウィバリー作) (河田禎訳, 平凡社) 名選手物語 (弓館芳夫著, 毎日新聞社)	スポーツのおこり (葛馬邦彦, 保育社)
1957		嘉納治五郎 (高野正己, 講談社) 世界登山物語 (串田孫一編, アルス北原) マッターホルンの戦い (カルル・ヘンゼル作) (尾崎賢治訳, 平凡社)	オリンピック物語 (川本信正, 青葉書房)
1958		長嶋茂雄-若き王者 (五十公野清一, 大興出版部) ベーブ・ルース (白木茂, 偕成社) スポーツの英雄たち (来栖良夫等編, 宝文館)	
1959			
1960		ゲーリック (千葉寿夫, ポプラ社)	

戦後児童文学に表わされたスポーツおよびスポーツ観の一考察

	フィクション	ノンフィクション	入門書・解説書
1960		ベーブ・ルース (赤坂包夫, ポプラ社) スポーツマンシップ物語 (野口・佐々木, ポプラ社)	
		ベーブ・ルース (中山光義, 偕成社)	オリンピックの歩み (鈴木良徳, ポプラ社)
1961		アルプス登頂記 (ウィンパー著 安川茂雄訳, あかね書房) エヴェレストをめざして (J. ハント著 松方三郎訳, 岩波書店)	
1962		ベーブ・ルース (二反長半, ポプラ社)	
1963			世界のオリンピック (大島鎌吉, 偕成社)
1964		ベーブ・ルース物語 (五十公野清一, 日本書房)	オリンピックのすべて (鈴木良徳, 講談社)
1965		日本の山に生きた人々 (安川茂雄, さ・え・ら書房)	少年少女東京オリンピック全集 (1-3) (黎明書房)
1966		少年少女東京オリンピック全集 2 美しい人間像 (藤田圭雄, 黎明書房) 記録をうちたてた人々 (鈴木良徳, さ・え・ら書房)	
1967			
1968			
1969	小説 巨人の星-1 (梶原一騎, 講談社)		
1970	小説 巨人の星-2~4 (梶原一騎, 講談社)		
1971	小説 柔道一直線 (梶原一騎, 朝日ソノラマ)	小説 太田幸司 (北島八穂, ポプラ社)	
1972		エヴェレスト登頂 (シプトン作 白木茂訳, 集英社) エベレストへの道 (安川茂雄, ポプラ社)	
1973			
1974	最後の一球(永井明, 国土社) 甲子園熱球物語 (砂田弘, 講談社)	甲子園物語 (木暮正夫, 偕成社) ベーブ・ルース (久米元一, 講談社)	スポーツの夜明け (城丸・永井, 新日本出版社) スポーツとは何か (中村敏雄, ポプラ社)
1975		王選手物語(林田修, 偕成社)	
1976	甲子園の土 (藤田圭雄, 講談社)	巨人の太陽-長嶋茂雄物語- (梶原一騎, 読売新聞社)	スポーツのあゆみ (川本信正, ポプラ社) オリンピックの歴史 (鈴木良徳, ポプラ社)

吉野和子・村上春夫

“IMAGE OF SPORTS WRITTEN IN POSTWAR CHILDREN'S BOOKS”

by

Kazuko Yoshino and Haruo Murakami

This research has been made for the study of characteristics and points of children's books written on the theme of sports, through the analyses of those among “National Diet Library Catalogue of Children's Books”.

The democratic trend after the War in Japan had great influence on the progress of juvenile literature. This trend can also be seen in books for children written on sports. However, the number of those books were few, and the themes of them were such as stories on famous players, sportsmanship, and Olympics, etc.

Especially since 1960's by influence of the popularization of T.V. as well as Boy's Magazines, children's books written on so-called “Spirits of Sports” were spread out. On the other hand, books on technical explanations or on Olympics increasing, genuine books written on sports decreased.

Thinking of the influence of heroism and commercialism in sports not to say about flourishing of “Sports for Watching”, it will be quite necessary for both writers on children's books and investigators in Gymnastics to cooperate each other from the view-point that how will children be written and what will be written through the theme of sports in order to realize “Sports for All” in the future.